

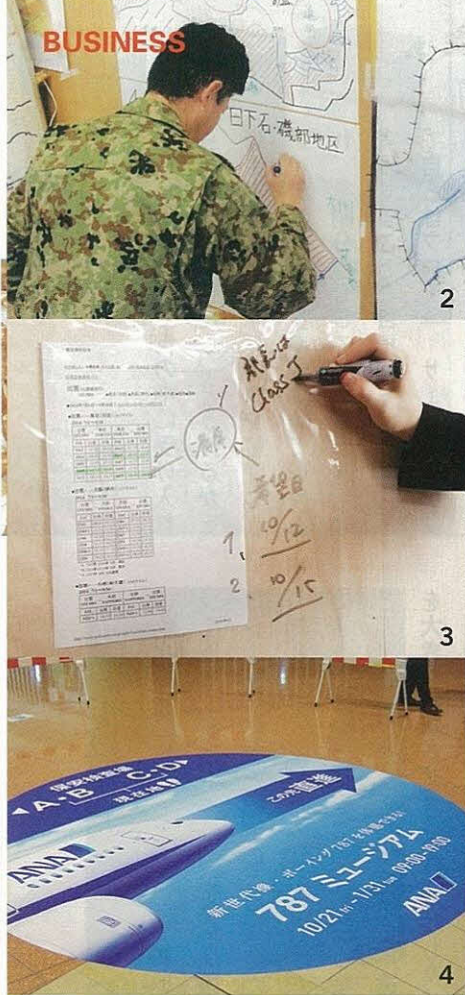
「先使用権」で活路あり 貼って剥がせるシートで オンラインワン

見れば見るほど不思議なシートだ。ベニヤ板にも貼り付き、何度も書いて消すことができる。この稼働域の広さで震災時に活躍、大ヒットとなった同社の開発アイデアについて聞いた

取材・文：木村元紀 写真：古石真由弥
Text: Motoaki Kimura Photo: Mayumi Furushii



1. 静電気を活用してどこにでも貼れるコーワライティングシート。しかも1年以上も剥がれない。素材が燃焼しても有害物質の出ないPP素材のため使用後に燃えるごみとして処分できるのもメリット。幅60cm×長さ80cmの25枚が基本セット。ハーフサイズや透明タイプもある。2. 東日本大震災の被災地での活用状況。3. 透明タイプは下に資料などを入れて上書きすることができる。さらに上から紙を貼ることも可能。4. ヤモリの足裏効果で強粘着のコーワシールシート。写真は羽田空港の床面。百貨店やテーマパークのディスプレイにも大活躍



アイデア商品が極限状態で 能力を発揮

時々刻々と変化する被災状況が、壁に直接貼られたシートに書き込まれていく。自衛隊の作戦会議用ボード、スタッフの本日の活動予定表、安否確認の呼び掛け、さまざまな情報が壁一面に提示される。

ライフラインが止まり、デジタル機器が使い物にならない東日本大震災の被災地で、復興・復旧に欠かせない情報のやりとりを媒介したのが、光和インターナショナルの「ライティングシート」だ。のりを使わず静電気の力で壁や窓ガラスに貼り付き、剥がすのも簡単で、何度でも書き消しできる。自衛隊・警察・消防・病院・役場・避難所、あらゆる場面で大活躍した。この実績が評判になり、テレビ局の経済情報番組で、最新アイデア商品情報を伝えるコーナーで紹介された約三〇〇社の総合チャンピオンを獲得した。

強粘着の「シエルシート」も好評だ。こちらは「分子間力」で貼り付く製品で、ツルツルしたガラス面でも平気で歩き回るヤモリの足裏の原理が応用されている。ガラス・金属・大理石などの平らな面ならば、何度

でも貼り剥がしができ、耐水・耐候性もあるため、屋外でも使える。公共施設や店舗などの床や、壁面の装飾・キャンペーン広告・案内表示などに採用されるケースが多い。のりの除去が不要で、女性の力でも対象を傷つけず簡単に剥がせるため、大幅なコストダウンにつながる。その利点を生かしてブレイクしたのは選挙だった。レンタルの選挙カーに候補者の情報を貼るのに、引っ張りだこだったという。

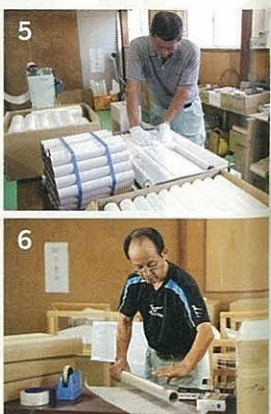
デジタル印刷技術が発達してプリントできる範囲は広がったが、展示や撤収は、今でもやはり人手に頼らざるを得ない。最後は、この作業性やコストが決め手になる。

細貝和則社長は、デジタルの最先端であるIT系企業から五〇歳でスピンアウトし、部下約一〇人を引き連れてオリジナル商品の製造販売会社を設立した。

「いくらデジタルで世の中が便利になっても、人が使うものはアナログが先。そのものづくりや物販で勝負したいと思ったのです」

要素技術を発掘して 組み合わせる

起業には二つのアプローチがあ



1～3. 鳥根県の生産拠点は手作り感あふれるアナログ工場。ライティングシートは、原反にシートサイズに合わせたミシン目を入れ、静電気を付加して巻き取る。長さや枚数の増減もできる。気候に合わせて静電気の強さを調整する。4～6. 梱包も手作業。企業のノベルティ用など、パッケージや内容量の違う顧客からの細い注文にも柔軟に対応する。7. ガイナを塗布した断熱シート。同工場でカットして全国に発送する

る。一つは、どこにもない画期的技術を発明し、実用化に向けてゼロから積み上げていく方法。応用分野は後から見いだされる。もう一つは、最終製品のイメージが先にあり、そのために既存の要素技術を組み合わせる方法。同社は後者のタイプだ。「製品開発のコンセプトは、マーケットが喜ぶものを作る。身近なところで自分たちにいちばん必要なものは何かと問いながら発想します。技術の積み上げではなく、イン



代表取締役社長
細貝和則氏

自身の「あったら便利」という経験から製品を開発。「中小企業はどこに隙間があるのか探ることが生き残りの秘けつ」と語る

スプレーシジョンで世の中に受け入れられると確信したら、どう作るかを考えて注力します。人脈を駆使し、アイデアや情報をかき集めて取り入れ、役割分担をしてスピードラーに実現することを目指しています」

自らはプロデューサーとして、要素技術をもった中小企業をマッチングし、最終製品まで仕上げていくのが最重要課題だ。途中で行き詰まったら、提携先を柔軟に変える。国内外にもこだわらない。ライティングシートのヒントになったのもドイツの製品だった。使い捨ての模造紙のようなレベルだったため、静電気帯電装置を協力企業と開発し、冒頭の

ような製品に仕立て上げた。シエルシートも、元はドイツ製の車体保護用シート。粘着と固定の二層構造だったものに、インクジェット印刷ができるよう受理層を張り合わせるなど五層構造に改良、アイデアで用途を大きく変貌させることに成功した。成功だけではない。製品化のプロセスでは何度も試作を重ね、中には実現しなかったアイデアも数多い。「駄目だと思ったときは、引き返してもいいし、また次の電車に乗ればいいんです。最終電車でなければ、その先の駅まで運んでくれる。その繰り返しです」（細貝社長）

先使用权と事実実験証明で権利を保護する

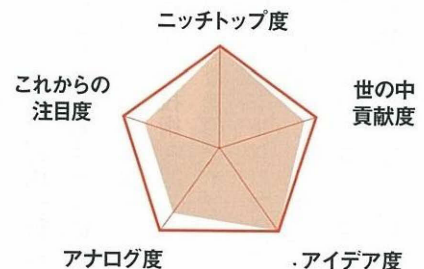
中小ベンチャーにとっては知的財産戦略も重要だ。同社はそこでもユニークなアプローチをしている。

「先行してマーケットを占めれば勝てる」と思い、特許は不要だと当初は考えていました。しかし、大手企業からのOEM（相手先ブランドによる製品供給）の引き合いもあり、権利関係を整理しておく必要性が出てきました。かといって特許権は、取得にも維持にも膨大なコストが掛かる上に、公開による技術流出の恐れ



のりを使わない自己粘着型強粘着素材などで、生活に便利なアイデア商品を開発するニッチトップ企業。同社のシートは内装建材として高いポテンシャルをもつ。

工場所在地：島根県雲南市大東町新庄415番地1
本社：東京都港区西新橋3-23-5御成門郵船ビル12F
設立：2003年 従業員数：18人



もありません。そこで、大きなコストを掛けずに、他社の特許出願に対抗できる先使用权を取得しました。中小企業にとっては強い味方です」

先使用权は特許法七九条に基づくもので、権利保全の証拠となる事実実験公正証書も取得。二つのヒット商品の守りを固めた。

そして三本目の柱が、今まさに育ち始めている。日進産業が開発した断熱塗料シアトップの「ガイナ」を、シエルシートにコーティングした断熱シートだ。PP（ポリプロピレン）素材に水性塗料を結合するところは困難とされてきたが、特殊シーラーを連携先メーカーと共同開発。施工の手間がかかっていた「塗料」を、短時間で手軽に「貼れる塗料」

へと進化させた。このプロジェクトは、中小企業同士がタッグを組むことで新たな領域・市場を生み出したものとして、経済産業省の「新連携計画事業」に採択されている。

断熱シートは、塗装工事が不可能だったりなじまなかったりする分野への応用が期待されており、東南アジアや中近東からも注目が集まる。

「当社の経営理念は『新たな文化を創造してソリューションを提供すること。固定した商品にこだわられません。特定の技術に閉じこもる路線ではなく、人と環境に何が必要かを掘り下げ、問題解決できる商品を作っていきたいです』（細貝社長）

同社のアプローチは中小企業の新たな可能性を垣間見せてくれる。